

特集「並列処理」の編集にあたって

柴山 潔[†] 小池 誠彦^{††}

本年度も「並列処理」を特集できることになった。本特集は昨年(1992年)6月に横浜において開催された「1992年 並列処理シンポジウム JSPP '92」(実行委員長: 富田眞治 京都大学教授)において採録・講演された一般論文の著者に、本学会・論文誌への投稿を呼びかけ実現したものである。情報処理学会の6研究会(計算機アーキテクチャ, オペレーティングシステム, プログラミング, アルゴリズム, 数値解析, データベース)と電子情報通信学会のコンピュータシステム研究会の共催による JSPP は、1989年に開始されて以来毎年の開催が恒例となり、並列処理技術に関する研究の高まりにつれて、参加者数もうなぎのぼりとなっているシンポジウムである。昨年の JSPP '92には300名を超える参加者があり、本学会が主催する国内会議の参加者数の新記録となった。会場は人と熱気があふれかえり、論文集や懇親会料理がたちまち品切れとなり、実行委員会幹事をあわてさせたことはまだ記憶に新しい。

この JSPP '92 で講演された54件の一般論文の著者に本特集への投稿を呼びかけ、それに応えて投稿された論文を本学会の論文査読規定に従う通常の査読手続きによって審査した結果、19件の論文が採録された。本特集はこれらの論文によって編集したものである。4回開催された JSPP も毎年少しずつ発表論文の傾向が異なっており、この JSPP '92 では、並列計算機アーキテクチャに関する論文がまだ多数を占めているもののその伸びが落ちつきを見せ、それに代わって並列処理の応用に関する意欲的な論文が目立った。

JSPP で講演された論文を主体にして編集した「並列処理」特集は過去3回(30巻12号, 32巻7号, 33巻3号)ある。この特集号の発行も恒例となっているが、それに甘えることなく毎回その趣旨が論文誌編集委員会において検討・確認されている。今回、論文誌編集委員会で承認された本特集企画の意味は「速報性を重視するためにアブストラクトによるスピード審査で採録されたシンポジウム論文について、シンポジウム前後で得られた新たな知見を加えてもらい、それを

一般論文と同じ基準の査読にかけて、より質の高い成熟した論文として学会員全体に披露する」ということである。すなわち、本特集は、「並列処理」に関心を持つ研究者が飛躍的に増大している現状を踏まえて、シンポジウムという種々の面で限られた場での発表成果を完成した論文にして広く学会員に周知することを目標として、論文誌編集委員会で承認された企画である。

ただ、「シンポジウム特集」という論文誌企画が恒例となるにしたがって、この企画そのものがそろそろ曲がり角にさしかかっていることを今回の編集過程で感じた。すなわち、特集の礎となるシンポジウム自体が盛況になるにつれて発表論文の質も高くなり、それとともに限られた開催期間のシンポジウム論文の採録率が下がり、アブストラクトによる審査によって採録されたシンポジウム論文が国際会議論文や論文誌採録論文などの「査読付き論文」と同程度の「価値」を持つ論文として認知されるという状況が出てきている。このため、「特集号の意味」と「論文の新規性」に関する投稿者および査読者個々の基準や認識の相違が顕在化してきたのである。今回は、査読者各位の裁量によって「新規性」について判定して頂いたが、もし同様の企画が次回もなされる際には、「シンポジウム特集」という企画そのものの意味をもう一度慎重かつ厳密に議論する必要がある。

本特集の論文は、特集の意義を生かすために、本年の JSPP '93 (1993年5月17~19日開催)までに一括掲載することを目標としたために、投稿論文の著者ならびに査読者各位には種々のご無理をお願いした。この場を借りて、各位のご協力に対し深謝の意を表します。また、特集号の編集を担当された各委員に対しても深謝の意を表します。

折しも、通商産業省の新プロジェクト“Real World Computing”や文部省の科学研究費補助金による重点領域研究「超並列処理」などが始まり、情報処理の基盤技術としての「並列処理」研究分野の益々の活性化が期待されている。JSPP や本特集がその一助となれば幸いである。

[†] 京都工芸繊維大学工学学部

^{††} 日本電気(株) C&C システム研究所